高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の実践に関する報告（第４報）
―実践状況及び運営状況の変遷とそれらにかかる包括的検討―

佐々木　　全*
（2017年２月15日受理）

Zen SASAKI

A Practical Study of "Eburi Club" for People with High Functioning Pervasive Developmental Disorders (4) : An Inclusive Investigation of Changes in Practice and Management

Ⅰ　問　題

筆者が取り組んでいる「エブリクラブ」は，高機能広汎性発達障害[注)]のある中学生以上の年代の青年たちを対象とした，地域における休日活動である。これは，小学生年代を対象とした「エブリ教室」の参加児の活動継続を意図して2000年に立ち上げられた（佐々木，加藤，2005[1)]）。

エブリクラブの参加者の中には，エブリ教室への参加経歴はないものの中学生以上の年代の活動を求めて県内各地からの参加者もあった。ここに，高機能広汎性発達障害を含む発達障害児者の青年期という「ライフステージ」にかかわる支援ニーズがある。このテーマは近年，学際的な注目がある（例えば，岩手ＬＤ研究会，2010[2)]）。また，高機能広汎性発達障害を含む発達障害児者の地域における休日活動という「ライフシーン」にかかわるテーマである。近年，高機能広汎性発達障害を含む発達障害児者にとって，学校や職場，家庭に次ぐ第三の場として，地域の居場所の必要性が指摘されている（はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会，2012[3)]；2013[4)]；2014[5)]）。すなわち，エブリクラブは，「ライフステージ」と「ライフシーン」というテーマの交接点でもある。

このような交接点を念頭に，筆者はエブリクラブの参加者にとっての「活動に打ち込むこと，仲間と共に活動の経過や成果を分かち合うこと」の実現を目指している（佐々木，加藤，2009[6)]）。この活動におけるミッションの実現を追求するプロセスでは，持続可能で実効性ある方法論を追求することは必然である。筆者は，これに関する研究を「実践論と運営論の包括的検討」と称して報告をしている。その一つとして，エブリクラブの運営状況について，「ヒト」（人材，すなわち人的環境），「モノ」（会場や物品などのハード面），「カネ」（資金，すなわち経費の調達と使途），「コト」（情報，すなわち活動内容のレパートリーなどのソフト面と，その他の必要情報）の観点によって記述し，それらが因果的または補完的に機能しあっていることを指摘した。例えば，会場（「モノ」）の確保状況によって，活動内容（「コト」）が因果的に規定されたり，活動内容（「コト」）によって，スタッフの不足（「ヒト」）を補完的に規定されたりすることである。このような運営状況についての記述を，実践状況と対照させ，相互作用を明ら

＊岩手大学教育学研究科

かにすることで両者の包括的検討を試みた（佐々木，名古屋，2014[7]）。

本稿では，これを踏まえつつ，近年のエブリクラブにおいて生じた実践状況及び運営状況の変遷に注目し包括的に検討する。

Ⅱ　目的と方法

本稿は，「高機能広汎性発達障害児者の支援に関する実践的研究（３）」として筆者らが取組む一連の研究に位置づけられるものである。この目的は，青年期の高機能広汎性発達障害者に対する，よりよい支援のモデルを提起することである。ここでいう支援モデルとは，支援の方針，内容，方法論などを包括する。その一翼に実践状況（内容や意義）と運営状況（体制や方法）を関連付けて検討する「実践論と運営論の包括的検討」がある。

本稿では，近年のエブリクラブに関して，実践と運営におけるそれぞれの状況，及びその相互作用を明らかにすることを目的とする。ひいては，これがエブリクラブと同様の趣旨で活動する発達障害関係の支援団体の活動の持続可能性を高める一助となることを願う。

研究の方法は，エブリクラブにおける実践及び運営に関する資料の整理とその内容の分析である。資料は，2012年４月から2016年３月（平成24～27年度）までのエブリクラブの実践及び運営記録である。この内容として，活動記録として毎回の活動後に発行する会員宛の通信とスタッフの事後ミーティングの記録，運営に関する記録綴りと，公表されている実践報告で本稿末尾に文献として掲げたものを得た。

また，整理と分析の観点として，以下の三点を挙げる。第一に，実践論の立場から，ミッションの実現状況について，実践内容の記録から整理し評価する。また，2012年４月から2016年３月までの経年的な変化を整理し明示する。

第二に，運営論の立場から，運営状況を分析的に把握するための４観点をもって，運営状況を整理し，明示する。４観点とは，「ヒト（人材，すなわち人的環境）」，「モノ（会場や物品などのハード面）」，「カネ（資金，すなわち経費の調達と使途）」，「コト（情報，すなわち活動内容のレパートリーなどのソフト面と，その他の必要情報）」である。

第三に，実践状況と運営状況について相互作用を整理し評価，総合的な考察を加える。

Ⅲ　結　果

１　エブリクラブの実践状況とその変遷

エブリクラブの2012～2015の実践状況を表１に一覧した。

2012年度は，これまでの経緯を踏襲した活動内容である。すなわち，年４回の開催であり，スポーツ，野外活動，創作活動，その他のレクリエーションという枠組みで企画をしている。なお，スポーツとしてタグラグビーに取り組むのは近年の傾向だったが，年度末の第４回においても，その他のレクリエーションとしてタグラグビーを設定している。これは，2013年度の活動内容をタグラグビーに特化するための移行手段でもあった。

そもそも，活動内容の特化を構想したのは，実は年度末のことであり，そのきっかけは運営スタッフの本職の都合によるものだった。実は，2013年度から勤務内容として週末の業務があったことからエブリクラブの活動の準備や運営などとの競合が想定された。そこで，2013年度の活動をタグラグビーに特化し，活動準備の労力を最小限にし，かつ，参加者の活動に対する習熟によって，活動自体を成立しやすくすることで，エブリクラブの持続可能性を高めることを構想した。この運営方法は，姉妹グループの「Act.（アクト）」で提案，実施されたものであり，エブリ教室にも移植され一定の成果を上げていた（佐々木全，2015[8]，佐々木全，名古屋恒彦，2014[9]）

2013年度は，開催の回数はこれまでの経緯を踏襲した年４回であったが，活動内容はタグラグビーに特化した。2014年も同様だったが，活動の開催自体をエブリ教室と合同にした。これには，

表１　エブリクラブの活動実績（2015.8. 現在）

年度	開催日	活動名	活動内容	活動の場	参加者	スタッフ人数	運営状況
2012（H24）	2012 6 9	タグラグビー	４チームに分かれ，タグラグビーのリーグ戦を行った．	公立M特別支援学校体育館	小学生３名，中学生２名 高校生・学生３名，成人３名，計１１名	スタッフ４名	従来通り，回替わりの活動内容を設定（①スポーツ，アウトドア，ものづくり，その他のレクリエーション）．ただし，次年度の活動内容特化に向けて，4回目の内容をタグラグビーとして，移行を意図した展開を考えた．
	2012 10 20	野外活動（遠足）	エブリ教室との合同行事．４チームに分かれ，芋の子汁を調理し，会食を行った．	盛岡市内のキャンプ場	小学生１名，中学生２名，高校生・学生４名，成人４名，計１１名	スタッフ９名	
	2013 1 12	ものづくり（木製フォトフレーム）	定型の木材パーツを組み立て，木製フレームを成型した．	盛岡市内の公民館	小学生５名，中学生１名，高校生・学生３名，成人３名，計１２名	スタッフ４名	
	2013 3 20	タグラグビー	４チームに分かれ，タグラグビーのリーグ戦を行った．	盛岡市内の公民館プレイホール	小学生７名，中学生３名，高校生・学生３名，成人３名，計１６名	スタッフ８名	
2013（H25）	2013 7 22	タグラグビー	３～４チームに分かれ，タグラグビーのリーグ戦を行った．	盛岡市内総合福祉施設体育館	小学生３名，中学生１名，高校生・学生２名，成人３名，計９名	スタッフ３名（うち1名は高校生）	実践内容について，タグラグビーに特化した．（なお，エブリ教室の活動も通年でタグラグビーとした）
	2013 11 15			盛岡市内総合福祉施設体育館	小学生３名，中学生２名，高校生・学生０名，成人０名，計５名	スタッフ３名（うち2名は高校生）	
	2014 1 12			盛岡市内の公民館プレイホール	小学生３名，中学生２名，高校生・学生２名，成人１名，計８名	スタッフ２名	
	2014 3 25			盛岡市内総合福祉施設体育館	小学生３名，中学生１名，高校生.学生３名，成人２名，計１６名	スタッフ３名	
2014（H26）	2014 6 8	タグラグビー（エブリ教室開催日に合わせての合同活動）	３～4チームに分かれ，タグラグビーのリーグ戦を行った．	盛岡市内の公民館プレイホール	小学生９名，中学生２名，高校生.学生２名，成人３名，計１６名	スタッフ４名	エブリ教室の活動と同時開催とした．（エブリ教室は月一回の開催だが，そのうち年4回が合同となる．）
	2014 8 3			盛岡市内の公民館プレイホール	幼児1名，小学生６名，中学生２名，高校生.学生３名，成人１名，計１３名	スタッフ３名	
	2014 11 2			盛岡市内総合福祉施設体育館	小学生６名，中学生２名，高校生.学生１名，成人１名，計１０名	スタッフ１名	
	2015 3 22			盛岡市内総合福祉施設体育館	小学生６名，中学生２名，高校生・学生４名，成人１名，計１３名	スタッフ５名（うち2名は高校生）	
2015（H27）	2015 4 12	タグラグビー（エブリ教室と統合での活動．）	エブリ教室と統合での活動．	盛岡市内の公民館プレイホール	小学生３名，中学生４名，高校生.学生４名，成人３名，計１４名	スタッフ２名	エブリ教室と運営及び活動を完全に統合した．それによって，活動の回数が増加した（月1回，年12回）．
	2015 5 10			盛岡市内の公民館プレイホール	小学生３名，中学生２名，高校生.学生２名，成人２名，計９名	スタッフ３名	
	2015 6 7			盛岡市内の公民館プレイホール	小学生４名，中学生１名，高校生・学生３名，成人１名，計９名	スタッフ１名	
	2015 7 12			盛岡市内の公民館プレイホール	小学生０名，中学生３名，高校生・学生３名，成人３名，計１６名	スタッフ５名	
	2015 8 2			盛岡市内の公民館プレイホール	小学生2名，中学生0名，高校生・学生2名，成人4名，計8名	スタッフ５名	
	2015 9 6			※			
	2015 10 12			※			
	2015 11 1			※			
	2015 12 6			※			
	2016 1 10			※			
	2016 2 7			※			
	2016 3 6			※			

※2015.8.現在において，活動予定であり会場は未定である。

二つの意図があった。一つはエブリクラブとエブリ教室のメンバー交流を意図したものである。2012年まで交流の機会として開催していたデイキャンプがなくなり，エブリクラブとエブリ教室のメンバーの交流がなくなっていたことから，それに代わる新たな交流の機会を設けようとした。もう一つは,活動における人数確保の趣旨である。上記した筆者の一身上の都合によって，エブリ教室への新規参加者の募集を一時中断していた。そのため，エブリ教室のメンバーが中学生になり，エブリクラブに移行することで，エブリ教室メンバーは減少していた。なお，エブリ教室参加者募集の中断は，募集にかかる周知，紹介の依頼，初回面接と活動へのフィッティングなど，従来運営スタッフが行っていた取り組みが，物理的，時間的な制約の中で十分にはできないものとの判断によるものだった。

2015年度は，エブリクラブとエブリ教室の活動を統合した。これは，前年度の合同開催によって，活動に比して適正な参加人数であったこと，活動の質として，どの年代のメンバーでも十分にプレーできることを確認できたことによる判断であった。また,「活動回数を増やしたい」というエブリクラブ参加者の長年の要望にも応えるものでもあった。

２　エブリクラブの運営状況とその変遷

エブリクラブの2012年の運営状況について図１に示した。これは，運営実態調査の回答に基づいて作成した「実践及び運営状況の包括的関連図」である（佐々木，2013[10]；佐々木，名古屋2014[11]）。また，これを下敷きとして，2015年の運営状況を図２に示した。

エブリクラブの運営状況の変遷において，最も大きな内容は，エブリクラブの活動をエブリ教室と統合したこと，活動内容をタグラグビーに特化したことである。このことを念頭に置きつつ，図１，図２を対照し運営状況の変更点について４観点に即して下記した。

(1)「ヒト（人材，すなわち人的環境）」

2012年では,「ヒト」について次のような状況があった。まず，運営スタッフは，一人であり，持続可能性に関する不安と，運営スタッフ個人の都合（日程など）が活動に与える影響が大きいことの懸念があった。この懸念は的中し，先に記した通り，運営スタッフの一身上の都合によってエブリクラブの実践状況，運営状況に大きな変更を要することになった。

次に，実働スタッフは，社会人（特別支援学校教員等），学生である。エブリクラブでは活動が単発であるために，活動内容やメンバーの参加申し込み人数に応じて必要人数を募り，最小限を充足させていた。総じて,「ヒト」に関する評価は,「必要最小限を満たしている（余力がほしい）」との回答だった。

2015年では，運営スタッフは，筆者一人である状況には変わりがない。実動スタッフは，これまで単発の活動に合わせての充足であったが，エブリクラブが毎月開催となり，スタッフの人数や，その固定的参加が必要となった。現在，新たな学生スタッフの参加があり，光明が見えたところである。

(2)「モノ（会場や物品などのハード面）」

2012年では，会場について盛岡市近隣のいくつかの施設（一般的な予約借用手続き，有料）を会場とした。また，活動内容や活動予定日に合わせて会場を確保しようとするために，予約手続きや他団体との競合があり運営スタッフには若干の心労が付きまとう。次に，物品については，活動内容に即して必要物品を調達していた。その一部は，備品を準備したり，自作したりしているが，個人からの借用，会場施設等関連施設からの借用などがある。また，借用に関して経費はかからないものの，所定の手続きを要した。総じて,「モノ」に関する評価は,「必要最小限を満たしている（余力がほしい）」との回答だった。不安や労力を抑えたいとの考えが含まれた。

2015年には活動内容が，タグラグビーに特化されたために，それに応じて会場や使用物品も特定

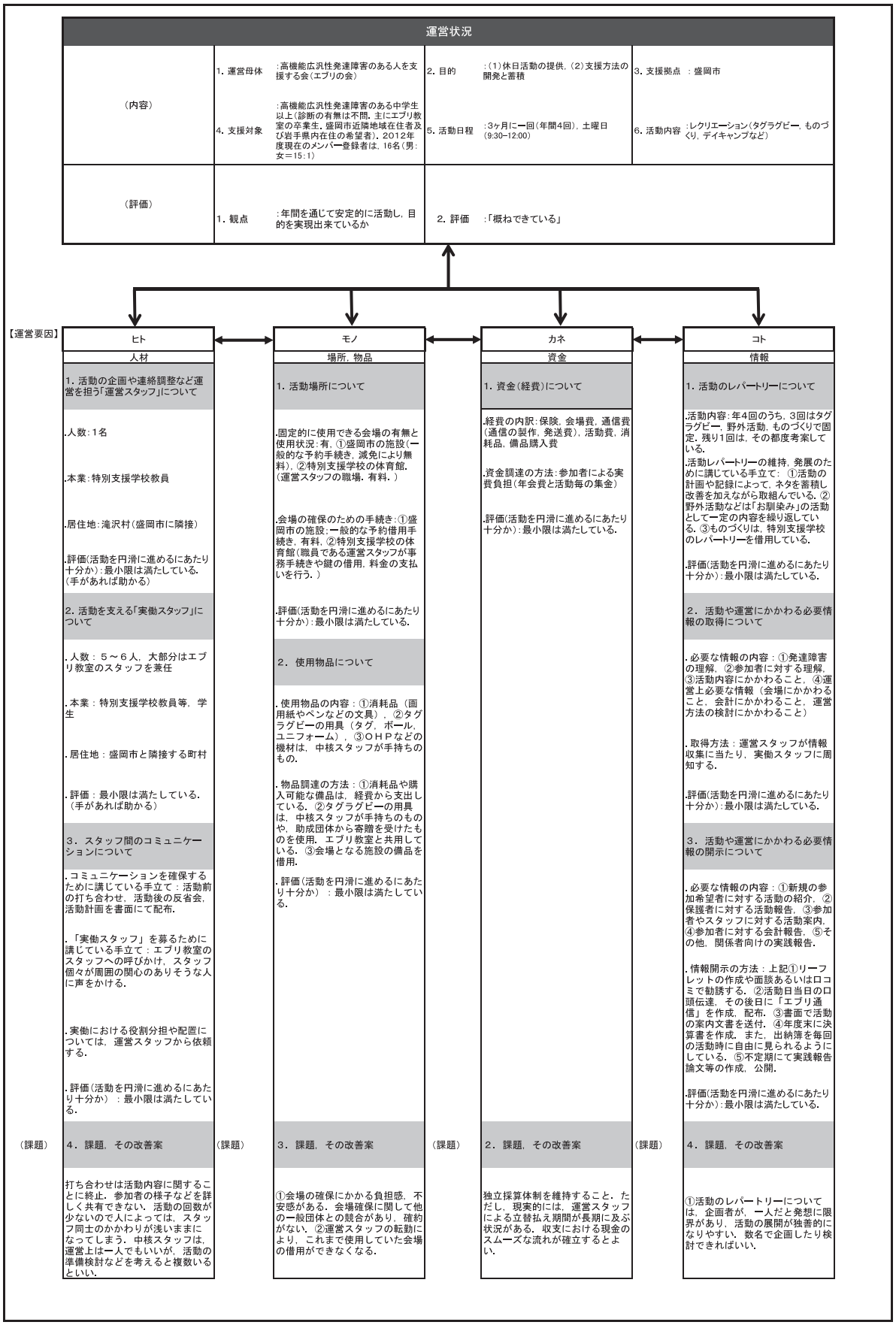

図１　実践及び運営状況の包括的関連図（2012）

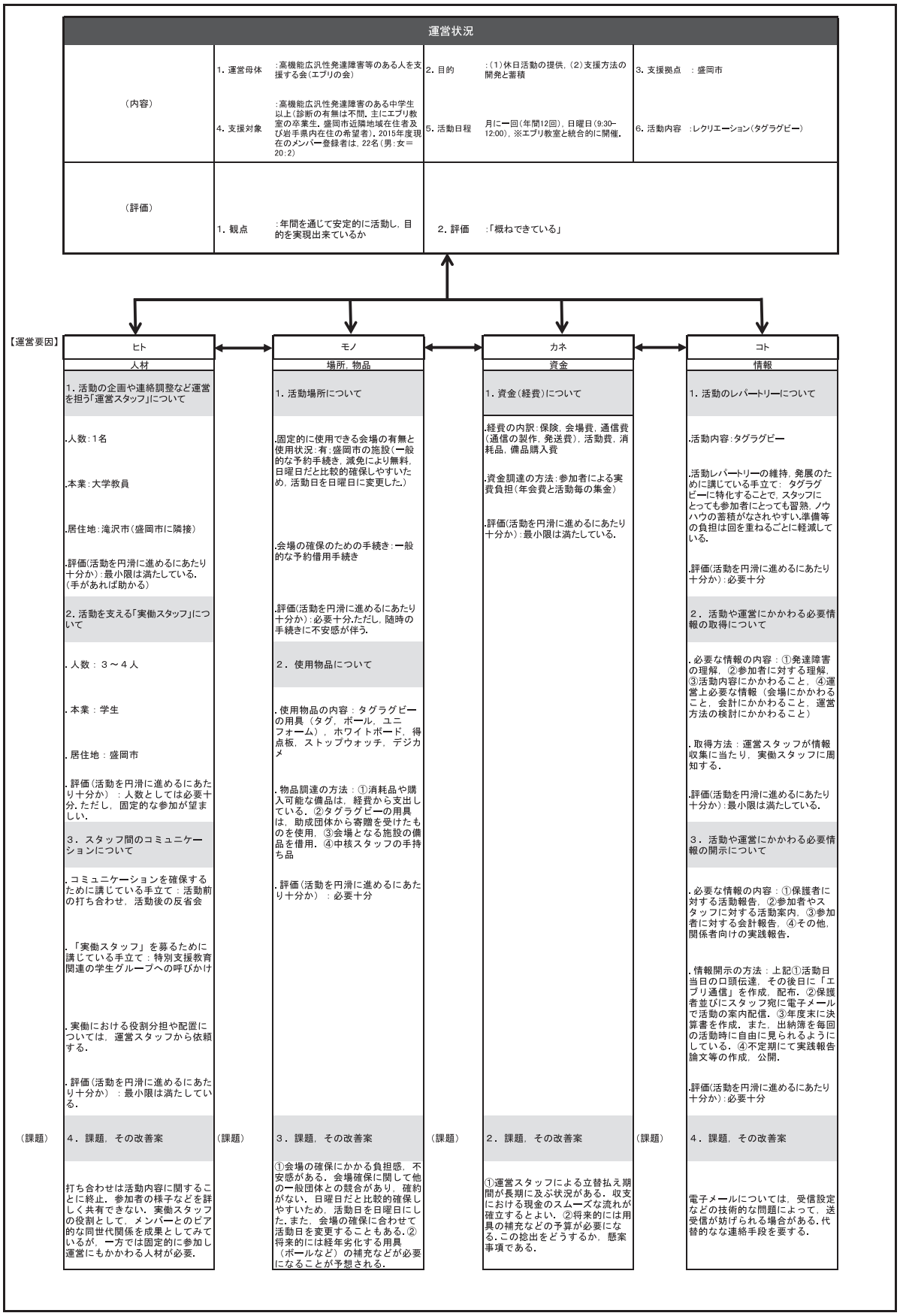

図２　実践及び運営状況の包括的関連図（2015）

することができた。会場の確保についての確約はない状況ではあるが，特定の会場との連絡となり労力は抑えられた。物品の管理については，経年劣化などへの対応は必要となると思われるが，現時点では過不足なく，また，管理にかかる労力も抑えられている。総じて，「必要十分」の状況である。ただし，会場確保にかかる懸念は皆無ではないが，これはごく一般的な懸念といえる。

(3)「カネ（資金，すなわち経費の調達と使途）」

2012年では，「カネ」について次のような状況があった。活動資金は，参加者からの集金による。集金額は，活動にかかる実費である。使途は，保険，会場費，通信費（通信の製作，発送費），活動費，消耗品，備品購入費である。会場の借用に伴う経費について，その一部を免除されることもあり，参加者の実費負担をできるだけ軽減するよう努めている。これに伴い，集金内容を次のようにした。①年会費（事務経費，保険，消耗品，通信など），②活動費（毎回の活動にかかる経費で，金額はその都度流動する）。これらの状況について，「必要最小限を満たす（余力がほしい）」との回答だった。ここでいう余力とは，スタッフの立て替え払いが生じている状況への懸念の解消を意味した。なお，近年では，資金の不足も懸念される状況があった。

2015年には活動自体をエブリ教室と統合したために，保険や通信にかかる経費を抑えることができた。また，活動内容をタグラグビーに特化したことで，会場も特定され，そこでの減免措置を得ることができた。総じて，「必要最小限を満たす（余力がほしい）」と考えるが，ここでいう余力とは，懸念の解消を意味する。資金の不足を懸念することはなくなったが，立て替え払いは常態化している。中期的な運営の中で立て替え払いの解消策を検討していきたい。

(4)「コト（情報，すなわち活動内容のレパートリーなどのソフト面と，その他の必要情報）」

2012年では，活動内容として，スポーツ，野外活動，創作活動，その他のレクリエーションの枠組みで，企画していた。活動のレパートリーとしての蓄積がなされることで企画自体の労力は軽減していた。企画者は運営スタッフであるが，一人だと発想に限界があり，活動の展開が独善的になりやすいのではないかとの懸念があった。総じて，「必要最小限を満たす（余力がほしい）」と考える。ここでいう余力とは，先に記した懸念の解消ということである。

2015年には，活動内容をタグラグビーに特化したために，企画の労力は激減した。支援の手立てとしての，活動の展開方法などの実践における恒常的な課題はあるものの，運営上では「必要十分」と考えられる。

Ⅳ　考　察

エブリクラブの実践と運営におけるそれぞれの状況，及びその相互作用を考察する。具体的には，活動内容をタグラグビーに特化したことによる実践，運営への相互作用，及び今後の課題を明らかにする。

１　運営への作用

活動内容を特化したことで，エブリクラブとエブリ教室の活動との統合が可能になった。これによって，エブリクラブの開催の回数を増やすことができた。また，会場確保や物品管理，さらには経費の使途の内容がシンプルになり，負担や懸念が軽減された。

しかし，活動の回数が増え，実働スタッフとの継続的なかかわり，関係性の深まりが期待できる状況になった。そのことで，実働スタッフの固定的な参加という要望が強まった。現時点でそれが運営上の課題として挙げられる。

２　実践への作用

活動内容を特化したことで，エブリ教室でタグラグビーに取り組んだ参加者が継続的にタグラグビーに取り組むことができたり，技術的な習熟によって発展的にプレーを楽しんだりしている。メンバーの，プレーにおける習熟は実働スタッフによる，メンバーのプレーを成立させるための技術

的な支援を必要としなくなる。実際に，一部のチームでは，スタッフが入らずメンバー同士の独立チームとして運営されている。この場合，スタッフは，ベンチワークとしてメンバー相互の関係性を整えたり，プレーの戦略を話し合ったりするなどの役割を担うことがある。

また，タグラグビーに不慣れなスタッフに対してメンバーが技術的な助言をしたり，励ましたりするような「ピア（横の関係性）」の役割としての価値が実働スタッフにはある。エブリクラブのメンバーの年代と大学生スタッフの年代が一致する現状，活動にかかわる技術的な面での対等性が，実働スタッフの新たな役割を浮き彫りにした。そもそも，同世代のかかわりが苦手だというメンバーが多い状況にあって，エブリクラブにおけるピアは貴重な関係性だろう。

なお，中長期的な視点で考えると，参加者の様々な要望が顕在化しているかもしれない。例えば，タグラグビーではない活動の要望である。その際には，2012以前の活動に戻すのではなく，タグラグビーを軸としつつ，その納会などという位置づけでデイキャンプを実施するなどの展開方法を考えたい。

また，タグラグビーのマンネリ化ということもあるかもしれない。これは実践における支援方法が問われる場面である。すなわち，支援の方法として「活動の展開方法」によって，マンネリを予防し，より発展的に楽しめるようにしたいと考える。そのモデルとして，他団体との交流戦などの取組がある（佐々木，2012[12]，佐々木，名古屋2014[13]）。

3　まとめ

経年的な取組の中で，エブリクラブはその運営のあり方を検討する時期に差し掛かったと自認している。エブリクラブの運営については，上記した課題の他，その運営スタッフの一身上の都合によって大きく影響される状況があり，それによって近年の運営状況の変遷があった。今後中長期的な安定状況を構築し運営することを目指したい。

注　釈

高機能広汎性発達障害とは，「知的障害を伴わない広汎性発達障害」という意味である。すなわち，「自閉症スペクトラム障害（ASD）」以前の用語で，知的障害を伴わない自閉症（いわゆる高機能自閉症），アスペルガー障害，特定不能の広汎性発達障害包括する概念である。

また，エブリの会では，参加児の障害名，診断名の有無や内容よりも支援のニーズを重視している。そのため，「高機能広汎性発達障害等」として「等」を付した表記をしている。

筆者らの一連の研究における診断名（障害名）の表記については，適語を使用すべく，その内容と使用開始のタイミングを目下検討中である。

謝　辞

エブリクラブのメンバーと保護者の皆様，共に活動したスタッフ諸氏に記して感謝いたします。

文　献

1）佐々木全，加藤義男（2005）：高機能広汎性発達障害児の指導に関する実践的研究（3）―「エブリクラブ」の教育実践に関する報告（第一報），岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，4，129-146.

2）岩手ＬＤ研究会（2010）：岩手発　発達障害のある青年たちの現状と展望―連携，その実質化を願って―.

3）はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（2012）：ラウンドテーブル学習会：花巻発，青年たちの「包括的支援モデル」をどうする!?，年報花童・風童，8，12-18.

4）はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（2013）：ラウンドテーブル学習会：花巻発，青年たちの「包括的支援モデル」をどうする!?，ご本人のニーズや思いを軸にしてつながりあう，年報花童・風童，9，32-45.

５）はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（2014）：ラウンドテーブル学習会：花巻発，青年たちの「包括的支援モデル」をどうする!?，青年センター構想の実現ビジョンはこれだ，年報花童・風童，10，46-50.
６）佐々木全，加藤義男（2009）：高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の教育実践に関する報告（第２報），岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，８，263-274.
７）佐々木全，名古屋恒彦（2014）：高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の実践に関する報告（第３報）―実践論と運営論の包括的検討にむけた予備的研究―，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，13，215-223.
８）佐々木全（2012）：「Act.」の運営状況，年報花童・風童，８，42-43.
９）佐々木全，名古屋恒彦（2014）：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第18報）―単元「タグラグビー」における，支援方法としての「活動内容及び展開」の検討―，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，13，203-214.
10）佐々木全（2012）：発達障害児（者）に対する「本人活動」における運営実態―岩手県内８グループを対象としたアンケート調査から―，年報花童・風童，８，27-41.
11）前掲論文７）
12）前掲論文８）
13）佐々木全，名古屋恒彦（2014）：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第18報）―単元「タグラグビー」における，支援方法としての「活動内容及び展開」の検討―，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，13，203-214.